

書物學

6



書物学にと始め

佐々木孝浩

鈴木俊幸

中野三敏

白川部達夫

植田康夫

高宮利行

◎近代初期出版史瞥見…山田俊治

和装活版本

美装の系譜

特別寄稿◎井田太郎

乗興舟瑣談

小特集◎鼎談…佐藤道生×佐々木孝浩×堀川貴司

清原家の官・学・遊

◎小特集

書目

日本文化

が語る

海野圭介

日比野浩信

一戸渉

岩坪充雄

◎インタビュー

和本がつなぐ人と文化

Documentary
和本—WAHON

の世界

BENSEI

日本「文」学史第一冊

「文」の環境——「文学」以前

A New History of Japanese "Literature"

Wiebke DENECKE (ボストン大学准教授)

河野貴美子 (早稲田大学文学学術院教授)

◎「日本「文」学史」の問題意識

「日本文学史」を代表する作品を順にあげていくとするならば、上位を占めるのはどのような作品であろうか。『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』『枕草子』『平家物語』『奥の細道』……。こうしたラインナップは、おおよそ大方の賛同を得られるものであろう。

あるいは、大学で「日本文学」を専攻した場合は、どのような作品を学ぶことになるか。そこで例えば平安期の文学として、『経国集』『和漢朗詠集』『本朝文粹』が取り上げられると、なるかどうか。おそらく多くの学生は、それが果たして日本文学なのかと首をかしげるのではないだろうか。しかし、

『経国集』は『古今和歌集』に先駆けて編纂された天皇勅撰漢詩文集であり、『和漢朗詠集』は平安中期以降長きにわたって人々の文学知識の基礎を支えたアンソロジーであり、『本朝文粹』は「本朝」における「文」の「粹」たる模範としての漢詩漢文作品を選び集めたものである。

いま私たちが通常思い描く「日本文学史」は、一八九〇年に三上参次と高津敏三郎によつて編纂された日本初の『日本文学史』以降の「新しい」日本文学史であり、その『日本文学史』は十九世紀に「国文学 (National Literature)」、すなわちある民族の特徴は自己の文学に内在するという概念がも

たらされ、そうした西洋からのインパクトを受けた後に作られたものである。そしてそのことは、よく知られたことではあるとはいえ、しかしながら私たちは、近代以降急速に「日本文学」としての立場を失ってしまった「漢文」や「和漢文」を含む文学世界がかつて日本に存在したことに対して、あまりにも冷淡であつたとはいえないか。

前近代の日本には、現在「文学」として認識されているとは異なる「文学」の概念、内容、意義があつた。例えば日本最初の漢詩集である『懷風藻』の序文は、日本における「文」の展開を、「文」字、「文」献、「文」明、「文」士・「文」人、「文」学など、現

在いうところの「文学」を超える、より大きな「文化史」として捉え説明している。それは多分に中国の学術文化、漢字漢文文化の影響のもとに発したもののなかにはあるが、「文」は広く学知と文化の総体を指す謂であつたといえる。それが、近代に至ると、そうした「文」の概念や意義が忘れ去られていく一方、それ以前には「文」から遠く離れた存在であつた仮名草子などの文体が「俗文学」として「文学」の重要な位置を占めることになったのは、興味深い「逆転現象」である。つまり、現在いうところの「文学」は、かつての「文」の概念に比べてその対象をある面では狭め、ある面では押し広げた

わけである。

近世・近代以後、西洋の概念や学問との出会いが大きな契機となつて、日本のみならず、東アジア漢字漢文文化圏においては、「言語世界の革命」とも

生活に深く入り込んでいく。しかしこ

れは実のところ、かつて日本に大陸から漢字がもたらされて以来の、画期的な言語世界の革命であつたといえる。ところがそのことは、現代の私たち

語を言い表すために日本で作られた翻

訳語であるが、それでは江戸時代以前には、そのような概念はいかなる言語をもつて表現されていたのか。あるいはまた、それに代わる概念がなかった

◎本書の構成と内容

本書の構成と内容は、従来の「日本文学史」とは大きく異なるものとなっている。

1、「文学」の概念に沿つてそれにそ

と社会」、第九章「経国の「文」、第十
十章「文の場」

5、和文のみを集中して取り上げるの
ではなく、和文、漢文、あるいはそ
れらが混交、交錯するさまざまな文
の世界を捉え直す。【第十一章「風流
の「文」と詩歌」、第十二章「漢と和
の「文」」

以上の構成と内容は、「日本文学史」
を知りたいと希望する読者の期待を
裏切るものかもしれない。この「日
本「文」学史」は、百年余りの間に築
かれてきた「日本文学史」の伝統から
は大きく外れるものだからである。例

えば本書は、『源氏物語』や『枕草子』、
『万葉集』など従来の「日本文学史」

が欠かさず取り上げてきた作品を個別
に説明することはしない。もちろん編
者は、『源氏物語』などの日本を代表
する作品を読み学ぶことに深い意味が
あることは十分に理解している。しか
し、何ゆえ『源氏物語』が国文学を代
表するカノンとなったのかということ
については、それを平安期の「文」の
世界に位置づけることによってこそ説
明が可能となるのではないか。従来の
「日本文学史」は、『源氏物語』とい

テキストや内容そのものを詳細に説い
てきた。しかし「文」の概念史を追究
する本書の方法を通して、『源氏物語』

が生み出された歴史的なコンテクスト
や、『源氏物語』を生み出すことを可
能にした環境、その文化的意義を、よ
り正當な、公平な形で示すことができ
るのではないか。そしてまた、『源氏
物語』をはじめ日本文学が有する世界
文学における特徴や意義は、平安期の
「文」の世界から『源氏物語』を捉え
直すことによってこそ明らかにするこ
とができるのではないだろうか。

●「日本「文」学史」全三冊の構想

——東アジアの「文」の意義と未来を問う

本書は『日本「文」学史』として、
「言語世界の革命」の前と後の日本の
「文」を検討するものである。まず第
一冊では「文」の環境、第二冊で
は「文」と人びと、というテーマ
を軸に「日本「文」学史」をとらえ、
そして第三冊では「文」から「文
学」へとして、現代に至る日本の
「文」と「文学」世界の形成と変遷に
ついて東アジアの枠組みにおいて検
証を試みる。

本シリーズは、日本の「文」の世界
を「和漢」の「文」に広く目配りして
捉えること、また日本の「文」を世界

の視点から捉えること、特に東アジア
の「文」の關係から捉えることに留意
して考察を進めるものである。

日本はかつて、東アジア漢字漢文文
化圏にあつて、いかなる「文」の世界
を育んだのか。日本の「文」は、東ア
ジアのそれとどのような異同があるの
か。また、近代以降日本が経験した
「言語世界の革命」は、東アジアにい
かなる影響、作用を及ぼしたのか。近
代以降の学知の再編に伴い、「文」の
世界は大きく様変わりし、そしてまた、
戦後から現在に至るグローバル化の
流れがもたらした「英語化」「米国化」
によって、かつて東アジアに展開し
た「文」の世界は既に消滅してしまっ
たかのようなのである。一方、近年は、中
国の急激な経済的文化的状況の変化や、
韓国ドラマに象徴されるポピュラーカ
ルチャーの発信によって、新たな東ア
ジアの「地域アイデンティティー」が
生み出されつつある状況にある。それ
では果たして、日本の、そして東アジ
アの「文化」はこの先どのように展開

し、どのような意義を発揮しうるのだ
ろうか。

また本シリーズは、現在当たり前の
ように存在している「文学」「史学」
「哲学」といった枠組みをいったん取
り払い、「文」の概念を柱として人文
学の新たな可能性を改めて問おうとす
るものである。例えば、新旧の「日
本古典文学大系」(岩波書店)に『日
本書紀』や『続日本紀』等のいわゆ
る「歴史書」が入り、「新訂増補国史
大系」(吉川弘文館)に『本朝文粹』
や『本朝続文粹』等のいわゆる「文学
書」が収められていること、また「日
本古典文学大系」と「日本思想大系」
(岩波書店)の双方に『古事記』が収
載されていることはどのように説明す
ることが可能であろうか。「文学」「史
学」「哲学」それぞれの立場をあまり
に厳然と分け隔てていては、日本の文
化と学知の真髄に迫ることは難しいの
ではないか。興味深いことに、西洋の
文化史においては、プラトン以来展開
されてきた「哲学」(philosophia)と
「詩(や文学)」の「喧嘩」の影響を受
け、「哲」と「文」は複雑な対立構造
をみせることとなった。つまり「詩／

文」は哲学的な真理を語るというより

もむしろその真理を曲解する可能性を

含む模倣(「ミメシス」)である以上、

文学はプラトンの哲学の理想の國家か
らは閉め出されなければならないもの
となつてしまつたわけである。それに

DENECKE・河野貴美子

DENECKE

男

吉

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

表するカノンとなつたのかということについては、それを平安期の「文」の世界に位置づけることによってこそ説明が可能となるのではないか。従来の「日本文学史」は、『源氏物語』という

そして第三冊では「文」から「文学」へ」として、現代に至る日本の「文」と「文学」世界の形成と変遷について東アジアの枠組みにおいて検証を試みる。

ルチャールの発信によって、新たな東アジアの「地域アイデンティティ」が生み出されつつある状況にある。それでは果たして、日本の、そして東アジアの「文化」はこの先どのように展開

文化史においては、プラトン以来展開されてきた「哲学」(philosophia)と「詩」(や文学)の「喧嘩」の影響を受け、「哲」と「文」は複雑な対立構造をみせることとなった。つまり「詩」

「文」は哲学的な真理を語るというよりもむしろその真理を曲解する可能性を含む模倣(ミメシス)である以上、文学はプラトンの哲学の理想の国家からは閉め出されなければならないものとなつてしまつたわけである。それに比べて東アジアにおいては、「文」と「質・真」は相互に補い合うものであり、両者は対立したり、排除するものではなかった。西洋の学問、学知の経緯を確認しつつ、それを相対化するこ

とによつて日本や東アジアの「文」の特徴と意義を見出し、日本の学術・文化をより深く理解していくことが可能となるのではないだろうか。

日本そして東アジアの言葉と学知の足跡を見直し、「文」の意義を改めて問うことは、今、そして今後の「人文」のあり方を問うことにはかならない。そうした目標と希望を掲げ、「人文の危機」が盛んに叫ばれ人文社会学の存在価値が問われつつある今こそ、真正面からその問題を見すえ、本書を発信したい次第である。

『日本「文」学史 第一冊 「文」の環境——「文学」以前』目次

序 言

Wiebke DENECKE・河野貴美子

Wiebke DENECKE

渡邊義浩

陣野英則

新川登亀男

市 大樹

佐々木孝浩

黒田 智

住吉朋彦

河野貴美子

河野貴美子

水口幹記

勝浦令子

榎本淳一

神野藤昭夫

緑川真知子

後藤昭雄

高松寿夫

滝川幸司

川尻秋生

水口幹記

阿部龍一

伊藤 聡

後藤昭雄

佐藤道生

渡部泰明

堀川貴司

高松寿夫

堀川貴司

陣野英則

Wiebke DENECKE

Jennifer GUEST

河野貴美子・Wiebke DENECKE

第一章 「文」の概念を通して日本「文」学史をひらく

第二章 古代中国における「文」の概念の展開

第三章 「文」の思想——和文に関する思想の萌芽をめぐって

第四章 「文」と非「文」の世界

コラム 1 木簡と「文」

第五章 モノとしての「文」——日本の書物の形態と内容の相関関係について

コラム 2 絵と文字

第六章 目録と文庫

第七章 「文」とリテラシーの基礎

コラム 3 辞書・幼学書・類書・注釈

コラム 4 大学寮

コラム 5 寺院の教育——僧尼志願者の「文」習得

第八章 「文」と社会①——社会階層と「文」

第八章 「文」と社会②——女性と「文」

コラム 6 ジェンダー理論と文

第九章 経国の「文」①——文体が担う社会的機能

コラム 7 外交と文

第九章 経国の「文」②——『典論』『論文』の受容と勅撰集の成立

第十章 文の場——「場」の変化と漢詩文・和歌・「記」

コラム 8 儒教の場と「文」

コラム 9 仏教の場と「文」平安京から長安へ——実恵の青龍寺あて書簡をめぐって

コラム 10 神祇信仰の場と「文」——中臣敏実の変容

第十一章 風流の「文」と詩歌

第十二章 漢と和の「文」①——秀句の方法

第十二章 漢と和の「文」②——藤原定家に見る縁語的思考

コラム 11 兼作の人

コラム 12 歌合と連歌

コラム 13 詩歌合・聯句・和漢聯句

コラム 14 「和」に描かれる「漢」の世界——『うつは物語』の学問と帝たち

コラム 15 「漢(文)」で「和」を描き出す——和歌序の文体

コラム 16 「和(歌)」で「漢(文)」を描き出す

——『日本書紀』『蒙求』に対する注釈的和歌の意義

あとがき

第二冊：2016年刊行予定／「文」と人びと——継承と断絶

第三冊：2017年刊行予定／「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す